

研 究

高校生の安全なインターネット利用に関連する要因

—インターネット利用の実態と共感性—

渡辺多恵子¹⁾, 磯貝 恵美³⁾, 田中 笑子¹⁾
 富崎 悦子¹⁾, 恩田 陽子¹⁾, 望月由妃子¹⁾
 徳竹健太郎¹⁾, 齋藤 希望⁴⁾, 安梅 勅江²⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、高校生の携帯端末からのインターネット利用の実態を把握するとともに、インターネット利用にともなう行動と共感性との関連を検討することである。高校生422名を対象に、無記名の自記式質問紙によりデータを得た。質問紙の回収率は96.8%であった。1日の携帯電話使用時間（中央値）は2.5時間、自分自身のウェブサイト所有は49.1%、情報教育の経験ありは94.4%であった。「他者のサイトへのアクセスあり」、「他者のサイトへのメッセージの投稿あり」は過半数以上、「誹謗・中傷の書き込み」、「有害サイトへのアクセス」、「アクセスして現実的に危険な経験をした」は、少数だが男女ともに見られた。「他者のサイトへのアクセスあり」、「他者サイトへのメッセージ投稿あり」など行動が活発な群の方が、他者に向かう他者志向型の共感性得点が高かった。一方、「有害広告に触発されて有害サイトにアクセスした」など危険な行動あり群の方が、他者志向型の共感性得点が低く示された。

Key words：インターネット，メディアリテラシー，情報モラル，共感性，高校生

I. 緒 言

近年、青少年がインターネット上の違法・有害情報に触発され発生した犯罪や、出会い系サイトと呼ばれるウェブサイトへのアクセスをきっかけに買春や暴行など犯罪に巻き込まれた例が多く報告されている^{1,2)}。「学校裏サイト」と呼ばれる学校公式サイトとは無関係に立ち上げられた電子掲示板や「プロフ」と呼ばれる自己紹介を発信するためのシステムが出現し、誹謗・中傷やわいせつ情報の発信は著しくなり、インターネット上でのいじめなどの問題が深刻化した³⁾。文部

科学省による青少年が利用する学校非公式サイト（学校裏サイトやプロフを含む学校公式サイト以外の学校や生徒に関するウェブサイト）に関する調査では、学校非公式サイト・スレッド（ひとつの話題に属する複数の記事をまとめたもの）数は38,260件（平成20年1月～3月現在）に及び、その半数に誹謗・中傷の言葉が含まれていた⁴⁾。

青少年のインターネット利用、とくに携帯電話を端末とした利用に関する研究は数多く行われ、インターネット利用における心理的效果などが検討されている^{5,6)}。また、青少年がインターネット上に氾濫して

Implications of a Safe Internet Environment for High School Students : Focus on the Students' Current Internet Usage and Their Empathy

[2303]

Taeko WATANABE, Emi ISOGAI, Emiko TANAKA, Etsuko TOMISAKI, Yoko ONDA, Yukiko MOCHIZUKI, Kentaro TOKUTAKE, Nozomu SAITO, Tokie ANME

受付 11. 1.17

採用 11. 9.20

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科（大学院生）

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科（研究職）

3) 愛知県西尾市（保健師）

4) 愛媛県新居浜市（保健師）

別刷請求先：渡辺多恵子 筑波大学大学院人間総合科学研究科 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1

Tel : 090-3342-4978 Fax : 0297-52-7066

いる違法・有害情報に、携帯電話などから容易にアクセスできる状況があることから情報リテラシーの必要性⁷⁾、情報モラルに関する知識の習得など情報モラル教育の必要性⁸⁾が指摘され、学校教育、学校保健の現場では、情報リテラシー、情報モラル教育に関する積極的な取り組みがなされている。しかし、逸脱行動や犯罪はなくなり、学校における教育の情報化はますます推進される状況である⁹⁾。

一方、昨今の青少年の犯罪の根底には、共感性の欠如(喪失)があることが指摘されている¹⁰⁾。また、インターネットを安全に活用するための個の要因として、情報リテラシー、情報モラルに加え、「共感スキル」が必要であることが述べられている¹¹⁾。インターネット上のやりとりは、文字、画像、音のみによるものであり、相手に対するより繊細な配慮や共感性が求められるが、インターネット利用における青少年の行動について、情報リテラシーや情報モラルに関する教育の必要性は指摘されているものの、共感性との関連は十分に検討されているとは言えない。

そこで、本研究では、高校生のインターネット利用の実態を把握するとともに、インターネット利用にともなう行動と共感性との関連を検討した。

II. 研究方法

1. 対象と方法

高校1年～3年生422名を対象とし、無記名の自記式質問紙を用いた集合調査法によりデータを得た。質問紙の配布と回収は協力施設の担当教員に依頼した。調査期間は、2009年7月8日～7月30日であった。

2. 調査項目

(1) 高校生のインターネット利用の実態

高校生のインターネット利用を「携帯電話に対応した学校非公認消費者生成メディアの利用」と定義し、「自己紹介や日記、掲示版などのウェブサイト(以下、ウェブサイトとする)の閲覧および書き込み」という表現を用いた。調査項目は、携帯電話の所有状況、携帯電話の使用時間、携帯電話利用に関する家族との制約、自分自身のウェブサイトの所有状況、ウェブサイト所有の校則による禁止、情報リテラシー、モラルなど情報教育の有無とした。

(2) インターネット利用にともなう行動

インターネット利用にともなう行動は「影響要因へ

の接触および影響要因による触発」と定義し、操作的定義は、行動1「他者とのやりとりへの接触」2項目、行動2「有害性をもつ情報への接触」2項目、危険行動「行動1, 2による触発」2項目の、3分類6行動に整理した。

(3) 高校生の共感性

共感性の測定には、多次元的共感性尺度¹²⁾を使用した。他者志向の温かい気持ちを持つ「共感的関心」、他者の気持ちや状況を想像する「気持ちの想像」、架空の他者に感情移入する「ファンタジー」、他者に向かわない自分中心の感情的反応を示す「個人的苦痛」の4因子30項目からなり、中学生、高校生、大学生を対象とした調査により内的一貫性による信頼性の検討が行われている($\alpha = .63 \sim .86$)。また Interpersonal Reactivity Index : IRI¹³⁾との基準関連妥当性が検証されている。

3. 分析の方法

対象者特性、インターネット利用の実態、インターネット利用にともなう行動の実態、共感性の実態について単純集計した。インターネット利用には性差が指摘されている¹⁴⁾ことから、実態と行動は男女別に算出した。

さらに共感性(次元別)とインターネット利用にともなう行動について2変量解析を行った。行動1「他者とのやりとり」への接触については、男女差が見られたため、行動1との関連については、男女別に分析を行った。検定の有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

調査の目的、方法、成果、個人情報取り扱い、および承認せずとも不利益を受けないことについて書面と口頭で説明し、調査協力施設の承認を得た。質問紙には、調査の目的、調査結果の活用、調査結果を目的外に使用しないこと、および質問紙への回答は個人の自由意志であり回答しなくても不利益は受けけないことを明記し、質問紙への回答をもって調査への同意と見なした。また、個人の回答が他に漏れないよう個別の回収用封筒を用意した。なお、本研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 研究結果

1. 質問紙の回収率と分析に使用するデータ

質問紙を配布した436名中, 422名から回答を得た(回収率96.8%)。そのうち, 属性と共感性尺度の項目に欠損のない393名を分析の対象とした。

2. 対象者の特性 (表1)

対象者は, 男子38.9%, 女子61.1%, 高校1年生38.4%, 2年生32.8%, 3年生28.8%であった。家族構成は核家族69.7%, 拡大家族30.3%であった。携帯電話の所有は98.0%であった。

3. インターネット利用の実態 (表2)

1日の携帯電話使用時間の中央値は, 男子1.00時間, 女子3.00時間, 合計2.50時間であった。携帯電話利用に関する家族との制約ありは31.0%であった。自分自身のウェブサイトの所有は, 男子30.1%, 女子61.3%, 合計49.1%であった。自分自身のウェブサイト所有の校則による禁止は100%であった。情報リテラシー, 情報モラルなどの情報教育の経験ありは, 男

表1 対象者の特性 n = 393

項 目	人 数	割合 (%)
性 別	男子	153
	女子	240
学 年	高校1年	151
	高校2年	129
	高校3年	113
家族構成	核家族	274
	拡大家族	119
(核家族内訳)	両親	248
	母親のみ	20
	父親のみ	4
	祖父母のみ	2
(拡大家族内訳)	両親+祖父母	102
	母親+祖父母	12
	父親+祖父母	5
きょうだいの有無	あり	342
	なし	51
(内訳)	年上	132
	年下	160
	両方	50
携帯電話の所有	持っている	385
	持っていない	8

表2 インターネット利用の実態 (時間)

		男	女	合計	p
		n = 153 人数 (%)	n = 240 人数 (%)	n = 393 人数 (%)	
1日の携帯電話使用時間		1.00(0.50～3.00)	3.00(2.00～5.00)	2.50(1.00～5.00)	***
携帯電話利用の家族との制約あり		49(32.0)	73(30.4)	122(31.0)	
(内訳)	利用できる金額が決められている	21(42.9)	35(47.9)	56(45.9)	
	利用時間が決められている	2(4.1)	5(6.8)	7(5.7)	
	書き込みを禁止されている	3(6.1)	6(8.2)	9(7.4)	
	インターネットを禁止されている	8(16.3)	11(15.1)	19(15.6)	
	メールを禁止・制限されている	2(4.1)	0(0.0)	2(1.6)	
	フィルタリングがかけられている	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
自サイトの所有		46(30.1)	147(61.3)	193(49.1)	***
自サイト所有の校則による禁止		153(100.0)	240(100.0)	393(100.0)	
情報教育を受けた経験あり		139(90.8)	232(96.7)	371(94.4)	*
(内訳)	親など家族から	30(21.6)	56(24.1)	86(23.2)	
	学校で先生から	84(60.4)	158(68.1)	242(65.2)	*
	学校で警察の人から	62(44.6)	132(56.9)	194(52.3)	**
	友だちや後輩から	11(7.9)	14(6.0)	25(6.7)	
	先輩から	2(1.4)	3(1.3)	5(1.3)	
	雑誌で読んだ	11(7.9)	17(7.3)	28(7.5)	
	インターネットで見た	25(18.0)	21(9.1)	46(12.4)	*
	テレビで見た	53(38.1)	98(42.2)	151(40.7)	

※ p : pearson の χ^2 検定
※ 1日の携帯電話使用時間は中央値 (25~75%) を示した (p : Mann-Whitney の U 検定)。
※* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

子90.8%, 女子96.7%, 合計94.4%であった。

4. インターネット利用にともなう行動

(1) インターネット利用にともなう行動の実態 (表3)

「行動1 他者とのやりとりへの接触」の「他者サイトへのアクセスあり」は79.4%, このうち、「他者サイトへのメッセージの投稿あり」は68.9%であった。

他者サイトへアクセスした者のうち、「行動2 有害性をもつ情報への接触」の「ウェブサイト上で自分自身が誹謗・中傷を受けたことがある」は7.4%, 「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見たことがある」は38.5%であった。

「危険行動 行動1, 2による触発」の「他者にむけた誹謗・中傷の書き込みをした」は3.8%, 「青少年の健全育成の観点からみた有害情報にアクセスした」は4.5%, 「アクセスをして現実的に危険な経験をした」は1.3%であった。

(2) 他者のサイトへのアクセス目的 (表4)

他者のサイトへのアクセス目的は、男女ともに「暇つぶし」(男子89.2%, 女子87.2%)が最も多く、次いで「友だちとの連絡」(男子15.1%, 女子25.7%), 「友だちに関する情報交換」(男子9.7%, 女子19.7%)であった。

5. 共感性の実態 (表5)

「共感的関心」は男子3.62, 女子4.04で、女子の得点の方が有意に高かった($p < 0.001$)。「気持ちの想像」は男子3.20, 女子3.60で、女子の得点の方が有意に高かった($p < 0.05$)。「個人的苦痛」は男子3.00, 女子3.17で、女子の得点の方が有意に高かった($p < 0.01$)。「ファンタジー」は性別による有意差は見られなかった。

6. インターネット利用にともなう行動と共感性との関連 (表6)

有意な関連が見られた項目のみを表6に示した。

行動1-1「他者のサイトへのアクセス」については、行動あり群の方が、他者志向の共感性である「共感的関心」、「気持ちの想像」、「ファンタジー」が有意に高い値を示した。男女別にみても「気持ちの想像」と「ファンタジー」において同様の結果が示された。

行動1-2「他者のサイトへのメッセージの投稿」は、行動あり群の方が、他者志向の共感性である「共感的

関心」が有意に高い値を示していた。男女別にみると、女子において同様の結果が示された。

行動2-2「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た」については、行動あり群の方が、他者志向の共感性である「気持ちの想像」が有意に高い値を示した。

危険行動-2「有害サイトにアクセスした」については、危険行動あり群の方が、他者志向の共感性である「ファンタジー」が有意に低い値を示した。

IV. 考 察

1. インターネット利用と行動の実態

(1) インターネット利用の実態

本研究への協力を得た高校生の98.0%が携帯電話を所有しており、69.0%が携帯電話使用に関する家族との制約は「ない」と回答していた。ほぼ全員がインターネット上での「他者とのやりとり」や「有害性を持つ情報」に接触する機会を持っており、接触するか否かの行動は約7割が自己に委ねられていると考えられる。また、自分自身のウェブサイトは、校則で禁止されているにもかかわらず、約半数が所有していた。校則等による禁止には、大きな効果は期待できないと考えられる。

(2) インターネット利用の性差

本研究ではインターネット利用の性差が示された。「携帯電話の長時間使用」、「自分自身のウェブサイトの所有」、「他者サイトへのアクセス」、「他者のサイトへのメッセージの投稿」は女子の割合が有意に高かった。インターネット上での人間関係の構築の仕方は男女で異なり、女子は情緒的な親密性とコミュニケーションを通じて人間関係を維持することや、男性がスローペースのコミュニケーションを好むことに対し、女性はインスタント・メッセンジャーなどに引きつけられることが指摘されている¹⁴⁾。また、女性の方が男性よりも相談支援など、オンライン上のサポートを求める傾向が強いことが報告されている¹⁵⁾。学校における情報リテラシー、情報モラル教育は、こうした性差への配慮が必要と考えられる。

(3) インターネット利用の目的から考える必要な取り組み

本研究において他者サイトへのアクセスの経験がない者は20.6%であり、女性においてはわずか8.8%であった。また他者サイトへのアクセス目的でもっとも多いのは「暇つぶし」であり、男女ともに約9割に達

表3 インターネット利用にともなう行動

	n	ない 人数 (%)	ほぼ毎日ある 人数 (%)	週3～4回ある 人数 (%)	週1～2回ある 人数 (%)	月に数回ある 人数 (%)	年に数回ある 人数 (%)	無回答 人数 (%)	p ^a
行動1 「他者とのやりとり」への接触									
行動1-1 他者のサイトへのアクセス	全体 393	81(20.6)	169(43.0)	37(9.4)	28(7.1)	50(12.7)	28(7.1)	0(0.0)	***
	男 153	60(39.2)	41(26.8)	14(9.2)	8(5.2)	21(13.7)	9(5.9)	0(0.0)	
	女 240	21(8.8)	128(53.3)	23(9.6)	20(8.3)	29(12.1)	19(7.9)	0(0.0)	
行動1-2 他者のサイトへのメッセージ投稿	全体 312	96(30.8)	34(10.9)	40(12.8)	34(10.9)	62(19.9)	45(14.4)	1(0.3)	**
	男 93	39(41.9)	8(8.6)	7(7.5)	7(7.5)	21(22.6)	11(11.8)	0(0.0)	
	女 219	57(26.0)	26(11.9)	33(15.1)	27(12.3)	41(18.7)	34(15.5)	1(0.5)	
行動2 「有害性をもつ情報」への接触									
行動2-1 ウェブサイト上で自分自身が誹謗・中傷を受けた	全体 312	280(89.7)	0(0.0)	2(0.6)	0(0.0)	3(1.0)	18(5.8)	9(2.9)	
	男 93	86(92.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.1)	3(3.2)	3(3.2)	
	女 219	194(88.6)	0(0.0)	2(0.9)	0(0.0)	2(0.9)	15(6.8)	6(2.7)	
行動2-2 ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た	全体 312	190(60.9)	1(0.3)	9(2.9)	15(4.8)	29(9.3)	66(21.2)	2(0.6)	
	男 93	62(66.7)	0(0.0)	3(3.2)	4(4.3)	6(6.5)	17(18.3)	1(1.1)	
	女 219	128(58.4)	1(0.5)	6(2.7)	11(5.0)	23(10.5)	49(22.4)	1(0.5)	
危険行動 行動1, 2による触発									
危険行動-1 他者にむけた誹謗・中傷の書き込みをした	全体 312	298(95.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(1.6)	7(2.2)	2(0.6)	
	男 93	89(95.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.1)	2(2.2)	1(1.1)	
	女 219	209(95.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(1.8)	5(2.3)	1(0.5)	
危険行動-2 青少年の健全育成の観点からみた有害情報にアクセスした	全体 312	100(32.1)	194(62.2)	10(3.2)	4(1.3)	8(2.6)			p ^b
	男 93	32(34.4)	51(54.8)	5(5.4)	2(2.2)	5(5.4)			
	女 219	68(31.1)	143(65.3)	5(2.3)	2(0.9)	3(1.4)			

※ p^a: 「ない」と「それ以外」の2値による性別に関する pearson のχ²検定※ p^b: 有害サイト広告を「見たことがない」、「見た」、「アクセスした」の3値による性別に関する pearson のχ²検定

※ *: p < 0.05 **: p < 0.01 ***: p < 0.001

※ 「アクセスし危険な経験をした」は、「広告から有害サイトにアクセスした」に含まれる(再掲である)

表4 他者のサイトへのアクセス目的

	男	女	合計	p
	n = 93 人数 (%)	n = 218 人数 (%)	n = 311 人数 (%)	
友だちづくり	4(4.3)	28(12.8)	32(10.3)	*
暇つぶし	83(89.2)	190(87.2)	273(87.8)	
ストレス解消	2(2.2)	5(2.3)	7(2.3)	
友だちとの連絡	14(15.1)	56(25.7)	70(22.5)	**
授業や試験の情報交換	2(2.2)	5(2.3)	7(2.3)	
部活やクラブの情報交換	7(7.5)	9(4.1)	16(5.1)	
先生に関する情報交換	0(0.0)	1(0.5)	1(0.3)	
学校に関する情報交換	2(2.2)	5(2.3)	7(2.3)	
友だちに関する情報交換	9(9.7)	43(19.7)	52(16.7)	*

※ p : pearson の χ^2 検定※* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

註) 他者サイトへのアクセスありは312であるが, アクセス目的は無回答1を除外し n = 311で集計した。

表5 共感性下位尺度の男女別・学年別中央値

		高1	p	高2	p	高3	p	合計	p
		n = 54		n = 62		n = 37		n = 153	
	男女	n = 97		n = 67		n = 76		n = 240	
共感的関心	男	3.58(3.31~4.08)	***	3.69(3.13~4.31)	**	3.54(3.31~3.88)	***	3.62(3.31~4.08)	***
(25~75%値)	女	4.00(3.54~4.31)		4.00(3.69~4.46)		4.08(3.69~4.62)		4.04(3.69~4.46)	
気持ちの想像	男	3.20(3.00~4.00)		3.20(3.00~3.80)		3.20(3.00~3.70)	**	3.20(3.00~3.80)	*
(25~75%値)	女	3.20(3.00~3.80)		3.40(3.00~4.00)		3.80(3.20~4.20)		3.60(3.00~4.00)	
ファンタジー	男	3.00(2.17~3.38)		3.00(2.17~3.88)		3.00(2.50~3.67)		3.00(2.33~3.67)	
(25~75%値)	女	3.00(2.50~3.50)		3.50(2.83~4.00)		3.33(2.67~3.83)		3.17(2.67~3.83)	
個人的苦痛	男	2.83(2.50~3.33)		3.00(2.33~3.38)		3.00(2.58~3.17)	**	3.00(2.42~3.33)	**
(25~75%値)	女	3.00(2.50~3.50)		3.17(2.67~4.00)		3.17(2.83~3.63)		3.17(2.67~3.67)	

※ p : 性別共感性尺度に関する Mann-Whitney のU検定

※* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

していた。文部科学省の調査においても76.8%の者が「暇つぶし」と回答していた⁴⁾。先行研究では, 変動していく情報社会, インターネットの特徴をとらえた, 安全なウェブサイトを考えていく必要があることが指摘されている¹¹⁾が, 暇つぶしに何気なく携帯電話を手に取り, 他者サイトへアクセスする者が多い状況から, 「携帯電話を活用した安全で有用な情報サイトの構築」を検討していく必要があると考えられる。

2. インターネット利用にともなう行動と共感性の関連

インターネット利用にともなう行動別に共感性下位尺度の得点をみると, 行動1-1「他者のサイトへのアクセスあり群」の方が, 他者指向型の共感性である「共感的関心」, 「気持ちの想像」, 「ファンタジー」の

得点が有意に高く, 行動1-2「他者のサイトへのメッセージ投稿あり群」の方が, 「共感的関心」の得点が有意に高かった。行動2-2「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た群」の方が「気持ちの想像」の得点が有意に高かった。共感性の得点の高い者が他者のウェブサイトに興味を示し, 多くアクセスし, ウェブサイト上で他者の感情に敏感に気づいていると考えられる。

一方, 危険行動-2「有害サイトにアクセスした群」の方が, 「ファンタジー」の得点が有意に低かった。しかし, 本研究において「有害サイトにアクセスした群」は10例と少なく, この結果のみから『他者志向型の共感性であり架空の他者に感情移入する「ファンタジー」が高いと, 他者のサイトにアクセスしても有害

表6 行動別共感性下位尺度の中央値

		行動あり		行動なし		p
		n	中央値（25%～75%）	n	中央値（25%～75%）	
行動1-1 「他者のサイトへのアクセス」						
共感的関心	合 計	312	4.00(3.54～4.38)	81	3.61(3.23～4.15)	***
	男	93	3.62(3.31～4.08)	60	3.54(3.15～3.92)	
	女	219	4.08(3.69～4.38)	21	3.84(3.46～4.61)	
気持ちの想像	合 計	312	3.50(3.00～4.00)	81	3.20(2.80～3.60)	***
	男	93	3.40(3.00～4.00)	60	3.20(3.00～3.55)	*
	女	219	3.60(3.00～4.00)	21	3.20(2.80～3.60)	*
ファンタジー	合 計	312	3.17(2.67～3.83)	81	2.83(2.17～3.42)	***
	男	93	3.17(2.67～3.92)	60	2.83(2.17～3.33)	*
	女	219	3.17(2.67～3.83)	21	3.00(1.83～3.58)	
行動1-2 「他者のサイトへのメッセージ投稿」						
共感的関心	合 計	215	4.00(3.69～4.46)	96	3.77(3.38～4.08)	***
	男	54	3.65(3.31～4.23)	39	3.53(3.31～4.23)	
	女	161	4.08(3.69～4.46)	57	3.92(3.54～4.15)	**
行動2-2 「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た」						
気持ちの想像	合 計	120	3.60(3.20～4.15)	190	3.40(3.00～4.00)	**
	男	30	3.50(3.00～4.00)	62	3.30(3.00～3.80)	
	女	90	3.80(3.20～4.20)	128	3.40(3.00～4.00)	**
危険行動-2 「有害サイトにアクセスした」						
ファンタジー	合 計	10	2.66(2.50～3.17)	294	3.25(2.66～3.83)	*
	男	5	3.17(1.50～3.33)	83	3.17(2.75～3.83)	
	女	5	2.67(2.50～2.67)	211	3.33(2.67～3.83)	

※ p : 性別共感性尺度に関する Mann-Whitney のU検定

※* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

※有意な関連が見られた項目のみ記載

サイトへはアクセスしにくい』と断定することはできない。今後、本研究で示された結果を仮説としたさらなる研究、すなわち、インターネット利用にともなう危険行動と共感性に関する多数例での詳細な研究が求められる。

現在の学校教育は、インターネットを活用していく方向で進んでいる。共感の発達は0歳から始まり、発達段階によって効果的な関わりはあるものの、思春期を迎えてからも十分に育まれる。社会的判断を下したり、他者の考えを自己に取り入れ総合判断する共感の出力中枢は前頭前野であるといわれているが、前頭前野は思春期もそれ以降も働き続ける¹⁶⁾。今後、インターネット利用にともなう危険行動と共感性の関連をより詳細に検討し、その関連を明らかにしていくことは、共感性強化の特徴をとらえた方法論を学校保健や学校教育実践の場に取り入れるための一助となり、青少年のインターネット利用にともなう逸脱行動や犯罪の抑制につながっていくと考えることができるのではないだろうか。

3. 本研究の限界と可能性

本研究は、自記式質問紙調査でありインターネット利用の実態などを必ずしも正確に反映していない可能性は否定できない。また、実際に危険行動を起こしている者のサンプルが少なく、共感性との関連を論じるには十分ではないことが否定できない。しかし今回得られたインターネット利用における行動と共感性との関連は、今後の研究に新しい視点を加えた。今後、サンプル数を増やし詳細な研究を行うことにより、安全なインターネット活用を実現できる可能性があると考えられる。

V. 結 語

高校生のインターネット利用にともなう行動の実態を把握するとともに行動と共感性との関連を検討した。他者志向型の共感性が高いと、インターネット利用にともなう行動が盛んになるが危険行動にはつながりにくい可能性が示唆された。情報リテラシー、情報モラル教育に加え、共感性を育む方法論を取り入れた

アプローチを行いつつ、メディア空間をデザインしていくことが求められる。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力をいただきました多くの方々にお礼を申し上げます。研究にご協力いただいた高等学校の先生方、地域の教育委員会、保健センターの職員の皆さま、研究にご参加いただいた対象者の皆さま、そして、阿部真理子先生に深謝いたします。

本研究は第58回日本小児保健学会（新潟）にて発表したものである。

文 献

- 1) 警視庁. バーチャル社会の弊害から子どもを守るために 最終報告書. 東京: バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会, 2006: 1-35.
<http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen29/finalreport.pdf> (2011年1月10日アクセス).
- 2) 内山絢子. 出会い系サイトと若者の規範意識. 思春期学 2006; 24 (2): 319-326.
- 3) 下田博次. 子どものインターネットリテラシー. インターネット白書 2007: 318-321.
- 4) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課. 青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査について. 青少年問題 2008; 55 (631): 24-27.
- 5) 内海春代. 情報化社会における青少年の「孤独」—ケータイでつながる—. 情報化社会・メディア研究 2008; 5: 61-70.
- 6) 赤坂瑠衣, 坂本章. 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響—パネル調査による因果関係の推定. パーソナリティ研究 2008; 16 (3): 363-377.
- 7) 国分明男. 青少年を取りまく有害サイトについて. 青少年問題 2008; 55 (630): 26-31.
- 8) 森山 潤, 鬼藤明仁, 高田美那子, 他. インターネット使用に対する高校生の加害的意識. 兵庫教育大学研究紀要 2008; 33: 127-133.
- 9) 文部科学省. 「教育の情報化に関する手引き」について. 2009a. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm (2009年12月12日アクセス).
- 10) 町沢静夫. いじめ・虐待そして犯罪の深層 失われていく共感性. 東京: 丸善株式会社, 2007: 25-113.
- 11) 渡辺多恵子, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 他. 子どもにとつて安全なインターネット環境の整備に関する研究—フォーカス・グループ・インタビュー調査より—. こども環境学研究 2010; 6 (3): 31-36.
- 12) 登張真穂. 青年期の共感性の発達: 多次的視点による検討. 発達心理学研究 2003; 14 (2): 136-148.
- 13) Davis MH. Measuring individual differences in empathy: evidence for a multidimensional approach. Journal of Personality and Social Psychology, 1983; 44 (1): 113-126.
- 14) Boneva B, Kraut R, Frohlich D. Using e-mail for personal relationships: the difference gender makes. American Behavioral Scientist, 2001; 45 (3): 530-549.
- 15) Mickelson KD. Seeking social support: parents in electronic support groups. In S. Kiesler (ed), Culture of the Internet. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 1997: 157-178.
- 16) 納富 貴, 納富 壽, 入江慎一郎, 他. 痛みと共感. 思春期学 2009; 27 (1): 45-52.

[Summary]

The purpose of this study is to clarify the status of Internet usage by high school students and to explore the relationship between this status and their empathy. The participants comprised 422 students. A questionnaire was administered to the students to gauge their Internet usage and empathy. Completed questionnaires were obtained from 96.8% of the participants.

The results showed that lively behavior on the Internet (visit to someone's Internet website, post the messages on someone's Internet website, etc...) was related other-oriented empathy. Also there were negative relationships between risk behavior on the Internet (inspired by hazardous commercial message, visit to hazardous site) and other-oriented empathy.

The findings of the study suggest that too little other-oriented empathy have a significantly higher risk of Internet usage. A new approach is required to develop the empathy of the students.

[Key words]

safe internet, media literacy, moral, empathy, high-school student